

令和 2 年 5 月 24 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02246

研究課題名（和文）戦後派作家と人文知の関わりに関する思想史的研究

研究課題名（英文）A Study in Intellectual History of the Relationship between Postwar Japanese Writers and Humanistic Knowledge

研究代表者

水溜 真由美（MIZUTAMARI, Mayumi）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：00344531

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後派作家と人文知の関わりを、戦後派作家の1人である堀田善衛に即して明らかにするものである。15年戦争下の体験および敗戦前後の上海滞在体験は、生涯にわたって堀田善衛の文学活動の中心的な基盤であった。本研究は、こうした体験を言語化、作品化する上で、青年時代に培われた人文知（教養）が極めて大きな役割を果たしたことを、歴史的事件を素材として書かれた小説や危機の時代を生きた実在の作家や芸術家を対象とした評伝・エッセイに即して詳しく分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、以下の3点である。堀田善衛の著作を包括的に検討し、その全体像を示したこと。とりわけ日本と上海における戦争体験と様々な著作との結びつきを、バックグラウンドの考察と作品分析を通じて具体的に明らかにしたこと。従来、エリート文化として批判的に捉えられることの多かった教養の意義を、堀田善衛の文学活動に即して明らかにしたこと。教養主義を戦後派共通のバックグラウンドとして位置づけることによって、戦後派作家を再評価する可能性を開いたこと。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the relationship between postwar Japanese writers and humanistic knowledge, focusing on the case of Yoshie Hotta. His experiences during the Fifteen-Year War and his stay in Shanghai before and after Japan's defeat formed a major basis for his literary activities. In this research, I argued that his education in humanistic knowledge he had acquired in his youth played a crucial role in bringing these experiences into language in his works of literature. To support my argument, I provided an in-depth analysis of his novels taking actual historical events as their subject matter, as well as his biographies and critical essays on writers and artists who lived through times of crisis.

研究分野：思想史

キーワード：戦争体験 教養主義 戦後派

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 戦後派作家をめぐる研究動向について。一部の作家、作品についての研究はさかんであるものの、戦後派作家全体については「時代遅れ」とのイメージが定着し、「戦後派作家」のフレームが学問的な議論の俎上に載ることは稀になっていた。

(2) 堀田善衛をめぐる研究動向について。近年、敗戦前後の上海滞在体験や上海を舞台とした作品に関する研究は活発化していたが、それ以外の著作についての研究は少なく、堀田善衛の全体像を明らかにするような先行研究は皆無とあって良い状況にあった。

(3) 教養および教養主義をめぐる研究動向について。1990年代以降に活発化した一連の社会的な研究によって、教養主義とは旧制高校を基盤とするエリート文化であるという理解が広く共有され、教養の意義の相対化が進んでいた。

(4) 研究代表者は、2013年頃から堀田善衛に関する研究に着手し、研究開始時点において、以下の7点の論文を発表していた。「堀田善衛『審判』論 原爆投下の罪と裁き」(『北海道大学文学研究科紀要』第143号、2014年7月)、「アジア・アフリカ作家会議と堀田善衛

(1) 第三世界との出会い」(『北海道大学文学研究科紀要』第144号、2014年11月)、「アジア・アフリカ作家会議と堀田善衛(2) 「政治と文学」」(『北海道大学文学研究科紀要』

第147号、2015年12月)、「ユダとしての知識人 堀田善衛『海鳴りの底から』論」(『北海道大学文学研究科紀要』第148号、2016年3月)、「堀田善衛と作家・芸術家の肖像(1) 西行」(『北海道大学文学研究科紀要』第150号、2016年12月)、「堀田善衛における

作家・芸術家の肖像(2) 鴨長明・藤原定家」(『北海道大学文学研究科紀要』第151号、2017年2月)、「堀田善衛『広場の孤独』論 20世紀における政治と知識人」(『層 映像と表現』vol.9、2017年3月)。

2. 研究の目的

本研究は、堀田善衛を中心とする戦後派作家にとって、人文知(教養)が十五年戦争下の例外的な体験を言語化・思想化する上で果たした役割を明らかにすることを目的とする。不条理な死や剥き出しの暴力を目の当たりにするような非日常的な体験は、一般に、言語化し難いものである。戦後派作家は十五年戦争下において、銃後、兵営、戦場、「外地」において、様々な非日常的な出来事に遭遇したが、そうした体験を作品化する上で、教養は重要な仲立ちとなった。なぜならば、人類の歴史は戦争、災害を始めとする非日常的な出来事に充ち満ちており、過去に、多くの先人たちが、そうした非日常的な体験の言語化、作品化を試みてきたからである。したがって、旧制高校や大学で学び、教養主義の洗礼を受けた戦後派作家の多くが、十五年戦争下の非日常的な体験に遭遇した際に、そうした体験に類似した歴史的出来事や様々な作品を想起したことは驚くにあたらない。今日、教養主義はエリート文化として批判的に論じられることが多いが、戦後派作家において、教養は非日常的な体験を言語化するための枠組みや視点を提供した。

しかし、もちろん、戦後派作家による「星董派論争」が明らかにしたように、教養主義は知識人をリアルな現実から逃避させる側面もある。教養主義を再評価する際には、教養の両義的な側面も視野に入れる必要がある。

本研究は、以上の点を戦後派作家の1人である堀田善衛に即して明らかにしようとするものである。堀田善衛を主な研究対象とする理由は、堀田が、生涯、「乱世」という言葉に執着し、古今東西の歴史的事象や文学、芸術作品を参照しながら「乱世的」状況を描き、思考した作家だからである。また、若き日に慶應大学でフランス文学を学び、友人たちと切磋琢磨しながら、日本の古典文学を始めとする古今東西の文化に関心を深めた堀田は、教養主義的な立場に立脚する点において、戦後派作家の典型例と言えるからである。さらに、堀田は、教養が現実から知識人を逃避させる危険についても極めて自覚的であったからである。

3. 研究の方法

堀田善衛の作品を分析する上で、神奈川近代文学館における「堀田善衛文庫」に所蔵されている創作ノート、手帳、草稿などを活用する。そのねらいは、主として、堀田が様々な作品を執筆する上で、どのような人文知(教養)を参照したのかという点について示唆を得るためである。また、堀田以外の戦後派作家の作品やバックグラウンドを、堀田との共通点に留意しつつ、比較検討する。

研究を進める上で、堀田の著作・活動を3つのカテゴリーに分類する。

(1) 「乱世的」出来事を描いた小説

堀田は、戦争、内乱、一揆などの歴史的出来事を素材とする多数の小説を執筆している。代表的な作品に、それぞれ、アメリカによる日本への原爆投下、島原天草一揆、朝鮮戦争、中国の国共内戦、南京虐殺を素材とした『審判』、『海鳴りの底から』、『広場の孤独』、『歴史』、『時間』などがある。これらの作品のうち、『審判』、『海鳴りの底から』、『広場の孤独』については、研究開始時点で作品論を発表済みであった。本研究では、『歴史』、『時間』について論じることとした。

(2) 「乱世」を生きた実在の人物についての評伝・エッセイ

堀田は、「乱世的」状況を生きた実在の作家、思想家、芸術家について多数の評伝・エッセイを執筆している。代表的な作品として、それぞれ西行、鴨長明、藤原定家、ゴヤ、モンテーニュを扱った「西行」、『方丈記私記』、『定家明月記私抄』、『ゴヤ』、『ミシェル 城館の人』

がある。研究開始時点で、「西行」、『方丈記私記』、『定家明月記私抄』については論文を発表済みであった。本研究では、『ゴヤ』と『ミシェル 城館の人』について論じることとした。

(3) アジア・アフリカ作家会議に関わる活動・著作

堀田は、1956年以降数十年間にわたってアジア・アフリカ作家会議の活動にコミットした。また、その関連で、第三世界や植民地支配について、多数の小説や評論を執筆した。これらについては、研究開始時点で2点の論文を発表済みであった。本研究ではこれらの論文の改稿を進めることとした。

4. 研究成果

研究開始後、以下の5点の論文を発表した。「乱世を生きる知識人像」(『海龍』第13号、2017年6月)、「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(3) ゴヤ」(『北海道大学文学研究科紀要』152号、2017年7月)、「堀田善衛における作家・芸術家の肖像(4) モンテーニュ」(『北海道大学文学研究科紀要』第153号、2017年11月)、「堀田善衛『時間』乱世を描く試み」(『北海道大学文学研究科紀要』第154号、2018年3月)、「堀田善衛『歴史』 中国の内戦を描く」(『北海道大学文学研究科紀要』第155号、2018年7月)。さらに、これら5点の論文と研究開始時点で発表済みの7点の論文を合わせて、著書『堀田善衛 乱世を生きる』(ナカニシヤ出版、2019年2月)を上梓した。同書は、「3. 研究の方法」で言及した3つのカテゴリーをふまえて3部構成とした(「第部 乱世を描く試み」、「第部 乱世を生きる作家・芸術家の肖像」、「第部 アジア・アフリカ作家会議へのコミットメント」)。また、序論「戦後派作家としての堀田善衛」を書き下ろした。

序論では、戦争体験が、戦後派作家を戦後派作家たらしめる共通の世代体験であることを明らかにした上で、堀田が生涯にわたって戦争体験(「乱世的」体験)を反復脅迫的に書き続けたことを確認した。また堀田が、15年戦争期に日本の知識人がおかれた状況と重ね合わせながら、「乱世的」状況の中で、行動の可能性を奪われ、ひたすら「見る」ことを強いられる知識人的な人物に強い関心を寄せたことを指摘し、その点を踏まえた上での堀田文学の全体的な評価を行った。

第部は、「乱世的」出来事を描いた小説を論じた5点の論文を収録した。これらの論文では、堀田が多くの小説の中で「行動の可能性を奪われ、ひたすら「見る」ことを強いられる知識人的な人物」を主人公に据えていることを明らかにすると同時に、乱世的な出来事を描いた古典的な作品を様々な形で参照していることを論証した。本研究開始後書かれた『時間』論では、『時間』がヴェルコールのレジスタンス小説『海の沈黙』を下敷きにして書かれた作品であることを詳細に論じた。

第部は、「乱世」を生きる実在の作家・芸術家に関する評伝、エッセイを論じた4点の論文を収録した。これらの論文では、堀田が豊かな人文知(教養)をバックグラウンドとして、乱世を生きた古今東西の作家・芸術家の身の処し方に強い関心を向けたことを明らかにした。その際、人文知(教養)の両義性をめぐる堀田のユニークな思想にも着目した。即ち、堀田は、西行、鴨長明、藤原定家、ゴヤ、モンテーニュらが優れた伝統文化の継承者、豊かな教養の持ち主であったことをふまえながら、伝統文化や豊かな教養が「乱世」の現実を直視する上での桎梏として機能したことも認識していた。本研究開始後に書かれた『ゴヤ』論では、西洋絵画の伝統から自由になることによって、ナポレオン戦争にまつわる凄惨な現実を直視し得たとする、堀田のユニークなゴヤ理解を明らかにした。同様に、『ミシェル 城館の人』論では、ラテン文学の豊かな知識から自由になることによって、フランスの宗教戦争をめぐる現実を直視し得たとする、堀田のユニークなモンテーニュ理解を明らかにした。

第部は、アジア・アフリカ作家会議に関わる活動・著作について考察した2点の論文を収録した。これらは実質的には本研究開始以前の業績なので、割愛する。

なお、当初の予定では、研究期間の最終年度に堀田善衛に関する著書を上梓する予定であったが、計画を1年間前倒しすることが可能になったため、最終年度は戦後派作家の一人である武田泰淳の研究に着手した。その成果は、「極限状況下における倫理—武田泰淳「ひかりごけ」、大岡昇平『野火』、同『俘虜記』」(『層 映像と表現』12号、2020年3月)、「武田泰淳の上海ものにおける敗戦と立ち退き」(『国語国文研究』154号、2020年3月)である。

は、武田泰淳の「ひかりごけ」を、同じく戦後派作家である大岡昇平の『野火』と比較した論文である。「ひかりごけ」と『野火』は、いずれも戦時下のカニバリズムを扱った作品であるが、両作品の主人公がカニバリズムに対して相反する態度を取っていることから、従来、対照的な作品として論じられてきた。しかし、当論文では、大岡昇平『俘虜記』も参照しながら、極限状況下における倫理的選択の不可能性を描いている点において、両作品が共通の立場に立っていることを結論づけた。また、『野火』がキリスト教をバックグラウンドとしていることや、『俘虜記』において親鸞『歎異抄』の一節が引用されていることの意味についても考察した。

では、上海ものと呼ばれる武田泰淳の一連の作品について、住居の位置づけに注目しながら、敗戦体験の描き方を考察した。武田は評論「滅亡について」において、日本の敗戦を「滅亡」をめぐる普遍的な体験として論じたことが知られている。当論文では、敗者が住居を喪失する体験を「滅亡」の体験として捉えると共に、武田が日本人と親日派の中国人の敗戦体験の相違に批判的な目を向けていることについても明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 水溜真由美	4. 巻 155
2. 論文標題 堀田善衛『歴史』：中国の内戦を描く	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 35-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.14943/bgs1.155.r35	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 水溜真由美	4. 巻 13
2. 論文標題 乱世を生きる知識人像	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 海龍	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 水溜真由美	4. 巻 152
2. 論文標題 堀田善衛における作家・芸術家の肖像（3） ゴヤ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 145-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.14943/bgs1.152.r145	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 水溜真由美	4. 巻 153
2. 論文標題 堀田善衛における作家・芸術家の肖像（4） モンテーニュ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 89-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://doi.org/10.14943/bgs1.153.r89	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水溜真由美	4. 巻 154
2. 論文標題 堀田善衛『時間』 乱世を描く試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://doi.org/10.14943/bgs1.154.r1	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 水溜真由美	4. 巻 154
2. 論文標題 武田泰淳の 上海もの における敗戦と立ち退き	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語国文研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水溜真由美	4. 巻 12
2. 論文標題 極限状況下における倫理 武田泰淳「ひかりごけ」、大岡昇平『野火』、同『俘虜記』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 層 映像と表現	6. 最初と最後の頁 60-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://doi.org/10.14943/92301	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 水溜真由美
2. 発表標題 武田泰淳と上海 住居を追われる人々をめぐって
3. 学会等名 2019年度日本近代文学会北海道・東北地区合同研究集会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 水溜真由美	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 445
3. 書名 堀田善衛 乱世を生きる	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----